

集団と個人をめぐる若干の問題

——フィアカントの所論を手がかりにして——

富士田 邦彦

集団の本質とは何か。集団とは、最も端的には、複数の人々が、程度の差はあれ、生活を共同にし、そのために、彼らの間に、意識および行為が一定方向に統合せしめられていく機能的単位が認められるところに成立するといわれる。このことは、かかる人々が、目標を共同にする事実に基づくと考えられる。人人が、目標を共同に志向するということは、必然的に共同の活動を伴う。ただし、活動の結果や成果を目標とし、そのために活動を営む場合もあれば、活動そのものを目標としたり、あるいは、目標を共同にする人々の存在の共同それ自体が目標になる場合も考えられる。これらを含めて、集団の本質は、目標志向の共同に求められる⁽¹⁾。その際にあらわれる人々の活動は、必ずしも同一のものではない。異質の活動が、全体として、共同の目標を志向している場合を分業というが、この種の活動も、ここでは〈共同〉とよんでよい。すなわち、共同とは、人々の活動あるいは人々それ自体が、複数でありながら、それらが統一した一体のものとして意識される場合に用いられる。ここでは、共同目標に対する複数の人々の活動と共同目標との関係を特にとりあげてみたい。

集団論あるいは集団と個人をめぐる問題の意義は、多少とも全体性を帯びている集団とその構成要素である諸個人との関係において緊張を伴いながら生起する社会的事実を究明することに尽きると思われる。その意味で、目標を共同にする集団諸成員間に認められる規範の作用と、それに制約されつつ成員として行為する諸個人の行為の関連を考察することが、この小論の主旨である⁽²⁾。

(一)

集団を如何なるものと見るべきか。前述の如く、それは、共同目標の志向を基盤として、客観的に見れば、複数の人々の行為に他に見られぬ独自の共通性

が存するとともに、主観的には、あいともに一団をなすとの意識が、持続的に認められる複数者の集合であると考えられる。

かかる意味では、集団は、その共通な行為様式（共通な行為様式が、一定範囲の人々の行為を規制する場合、それを規範とよぶ）の点で、客観的に統一され、諸個人の集合とは異なった「全体性 Ganzheit」をもち、たとえ成員の出入、交替があっても、そこに「固有の生命 Eigenleben」が保たれる面を備えている⁽³⁾。

また、目標を共同に志向することが、自我と他者の関係において、他者の関心、欲求、感情、運命等を自我のものと一体視し、同時に自我を他者に投入する事態を生み出す。すなわち、この二面における自我同視としての「我々意識 Wirbewußtsein⁽⁴⁾」が生じ、これが、主観的に集団の団結または統一をもたらし、集団の上述の客観的側面と表裏一体をなす。フィアカントによれば、この意味において、成員は、集団の単なる「部分 Teile」ではなく、集団の「分肢 Glieder」であるとされ、人格的統一体としての個人の存在は、集団にとっては、二義的に過ぎないと見なされる⁽⁵⁾。

上に見たように、フィアカントに従えば、集団は、その成員たる諸個人の総和とは異なり、それを超えた存在として認識され、集団自身が、それ自体独自の生命をもつ面が強調されている。集団の全体性および固有の生命を彼が主張するのは、この見解から生ずる指摘である。因みに、彼が集団とよぶのは、ゲマインシャフト的關係の「形象 Gebilde」であると考えられ、社会關係のもう一つの領域であるゲゼルシャフト的關係を集団の本質と見なしていない⁽⁶⁾。そして、三人以上の間に成立する客観化された形象を集団と見て、二人関係と区別する。すなわち、単なる二人関係のみでは、未だ集団が成立するに至らない。純粋人格的關係に加えて、当該關係を見守る存在があって初めて、統一的な〈我々〉が生じ、それが、複数の〈我〉を統括し、調和を与えて集団が形成されるのである⁽⁷⁾。

フィアカントは、ジンメル同様、社会の本質を「相互作用 Wechselwirkung⁽⁸⁾」に求めるが、この相互作用の中心は、ゲマインシャフト的關係にあり、ゲゼルシャフト的關係においても、その根底において、ゲマインシャフト

的關係が基礎をなしていると考えられている⁽⁹⁾。ただし、ゲマインシャフト的性格は、特に「生活ゲマインシャフト Lebensgemeinschaft⁽¹⁰⁾」に典型的にあらわれ、機械的な相互作用に基づく集団においては、その程度は劣るといふ。何れにせよ、集団には何がしかゲマインシャフト的性格が存在し、全体性を有することは確かであり、それは集団の成立態様の如何を問うことはない。

集団は、このように、単なる個人の集合ではなく、個人を超えた独自の性格、すなわち客観性をもつとともに、〈我々〉という主観的側面をも具有する。従って、たとえ純粹に目的合理的な意識に基づき、類似した関心を追求するために、人々が人為的に集団を形成した場合においても、彼らは、自己の利害のみに関わることなく、「集団関心 Gruppenangelegenheit⁽¹¹⁾」をも追求する。このことは、マッキーバーの集団論においても該当する。例えば、諸個人が「類似関心 like interest」に基づいて参加し、それによって成立している運動クラブにおいても、クラブ員は、単に個人の関心や名譽のゆえにではなく、クラブの勝利や發展を願う。従って、クラブ員は、自分が美技を披露しても、自軍が敗れば意氣沮喪し、自己の個別的関心が充たされなくとも、自軍の勝利に満足する。あるいは、家族においても、家族員が、自己以外の他者の不幸を悲しみ、幸福を願うのは、それが自己の利害に直結するからではなく、家族の存在自体が、まさに自己を含めた全員の「共同関心 common interest」であるからである⁽¹²⁾。このように、たとえ類似関心に基づく集団であっても、共同関心と類似関心が不可分に結びつき、織り合わされている。この意味で、集団を構成する諸個人は、全体に対する部分ではなく、各人に集団関心が浸透し、諸個人がそれぞれ、集団を体現し、他に対しては集団を代表しているのである。複数の人々の間に、客観的な全体性が認められ、それと諸個人の意識および行為が持続的に結びつくとき、我々は、集団の存在を認め、そのような諸個人を集団の成員とよぶ。この共同化された集団関心のゆえに、人は、自己の所属集団を価値あるものと見なして、成員として行為し、明確な集団意識をもつ。大学に所属する諸個人は、大学全体を意識し、その集団関心を志向する。この場合、諸個人は、大学内の部分的出来事や細部の活動を全体の出来事および活動と理解し、大学に共同所属する者として関心を抱く。それは、先述のように、

家族において、個別的成員の喜び・悲しみが、全体のものとして受けとめられることと同様である。

集団に特有の存在理由や、集団活動の基本原理は、何らかの象徴と結びつくことが多い⁽¹⁸⁾。象徴が、名称にあらわれようと、または、観念、事物、あるいは特定の人に結びつこうと事情は同一であるが、特に、集団成員に共通した理念、理想、イデオロギー等の観念に結びついた象徴は、集団における目標および存在の共同を意味するものとして、特別な価値をもち、それに対する共同志向は、とりもなおさず集団自体を維持しようとする熱烈な全体性への志向を喚起し、共同所属の意識、意欲を顕在化させる。この場合に見られる集団関心は、集団成員の意志を統一し、結晶化して、諸成員は、各々その体现者となる。

(二)

しかし、諸個人は、単に集団のためのみならず、自己自身のためにも生きていることはいうまでもない。集団は、構成要素たる個人を離れて超越的に存在する実体ではなく、複数成員の統一体であり、集団関心に向けられた意識も、実在物というよりは、類似した個人意識が共同化されたものである。その意味で、人間は、集団的性格とともに個人的自律性をも備えている。人間の集団的存在とは、一方で自律した個人であるとともに、他面で集団成員であるという二重の性格の結果として、常に緊張を伴っている⁽¹⁴⁾。集団の存在に集団関心が伴うと同様に、その体现者たる個人も、「個人関心 persönliche Angelegenheit⁽¹⁵⁾」なくしては存在しえない。個人関心と集団関心は、必ずしもあいまって発展するのではなく、双方の対立・葛藤を予期しているものである。この両者が、並行して存在することが難しく、各々が一方の犠牲の上に成り立ちがちなのが、この緊張の本性に属しているのである⁽¹⁶⁾。かかる緊張を通して、集団の存在は、劇的な動態的性格を帯びざるをえない⁽¹⁷⁾。

個人関心の豊富さは、個人の自律性、個性の発展を促進する。しかし、そこから生ずるエゴイズムは、しばしば集団関心と矛盾することがあるゆえに、集団の存立にあたっては、時に応じて、個人関心の自由な発動を抑える集団圧力

も必要である⁽¹⁸⁾。すなわち、自我は、他者あって初めて存在しうるのであり、個々の人間は、本質的に集団的存在、さらには社会的存在たらざるをえないのである。デュルケムによれば、およそ「社会的なるもの」すなわち社会的事実、個人に外在する。従って、人間が社会を形成する際にあらわれる「公共意識」ないし「集合意識」は、個人に外在し、個人を外から強制する力を持ち、個人の行為に常に圧力を加えているという⁽¹⁹⁾。彼の考えでは、人間の集団的存在においては、集団は外から個人を規制するものであり、個人は集団に服すると見なされる。集団における思惟・行為・感得の様式が、個人関心を超越して外在し、それが、個人的表出とは独立して認められる。その意味からして、集団意識は、個人の意識を超えて存在するものである。

我々が、全体を離れた原子的個人として、他者依存なく生を営みえないことはいうまでもない。その点で、個人関心に対して、集団関心がそれに掣肘を加え、強制することも必要であろう。その点、フィアカントも、「客観精神 objektiver Geist」が、自律性を持ち、個人のもつ「主観精神 subjektiver Geist」と対立するという⁽²⁰⁾。集団に存する行為様式が、成員を離れては考えられず、彼らの個別的な生活において実現されるものとはいえ、それは、個々人の主張や要求と対立することが少なくない。

しかし、主観精神は、客観精神によって規定されつつ、あいまって統一ある全体を形成している。そのメカニズムは如何なるものか。集団が個人を離れた実在ではないとすれば、それは次のように考えられる。集団関心や集団規範が、個人を超越して実体的に存在し、成員を強制して従わせしめるのではなく、それが共同で志向され守られるのは、成員の行為を見守っている周囲の眼によるのである。つまり、「行為者 Handelnde」が様式に従わなければ、「傍観者 Zuschauer」がこれを否認する⁽²¹⁾。すなわち、傍観者が、監視・拘束することによって、行為様式は守られるのであり、集団の客観性の維持、集団関心の追求も、窮極的には、傍観者としての成員の作用にほかならない。そして、この行為者と傍観者の役割は、絶えず交換される。それまでの傍観者が行為者となれば、行為者であった者が、傍観者として、行為者の行為を監視し、規制する。これが、フィアカントのいう「役割交換 Rollenwechsel」である⁽²²⁾。集団が個

人に加える規制と見られたものは、行為者としての諸個人が、以上のプロセスによって、規範に従い、そのことによって、共通な行為様式が維持されることを意味し、かくして、全体性を志向する共同の意識が支えられるのである。フィアカントのいう役割交換は、主として「習俗 Sitte」に基づいて説明された⁽²³⁾。習俗に対する個人の服従は、個人の当該習俗の価値に対する承認や自発的な服従の性向というよりは、傍観者が習俗を支持し、行為者に圧力を加えようとする機能を常に営み、行為者がその圧力に屈するという関係およびその立場の転換によって説明される。すなわち、このプロセスは、心理的現象ではなく、社会的現象である。このことは、習俗のみならず、先述の〈観念〉にも妥当する。集団関心が、集団成員に共通の理念、理想、イデオロギー等に関わるとき、集団の価値が強く意識され、集団規範に対する志向が明確にあらわれる。

このように、フィアカントにおいては、集団の行為様式は、行為者と傍観者の立場の転換を通して守られ、集団の統一が維持される。ただし、この説は、他面で、集団関心の個人関心に対する優越性をも意味している。それは、先述のように、個人が、一義的には、集団の「分枝」と見なされる点にも窺える。しかし、集団関心も、窮極的には、共同意識および共同目標への類似した個人志向の総体であろう。従って、マッキーバーもいうように、集団関心とは、個人の全体への関心が、諸成員に分有されたものと解釈した方が適当ではなからうか。

マッキーバーはいう。「一定期間以上、社会関係に自由に参加する人々が、社会的類似性を発達させ、ある共通な社会観念 social ideas, 共通な慣習、共通な伝統、共同所属の意識 sense of belonging together を所有するのは当然である⁽²⁴⁾。」存在の共同を通して、人々には、あいともに一団に属するという共同所属の意識（以下、共属意識という）が成立する。マッキーバーは、共属意識を、コミュニティの主要な要素として指摘したが、それは、コミュニティにとどまらず、およそ集団の存立に不可欠の要件である。この共属意識の内容には、「我々感情 we-feeling」, 「役割感情 role-feeling」, 「依存感情 dependency-feeling」が含まれるが⁽²⁵⁾, それはまさに、共同生活に参加し、その生活を全体

として維持しようとする意識にほかならない。かかる意識があるゆえに、先述のように、ある一人に関わることが、同時に他の者にも関わり、喜びも悲しみも、成功も失敗も共有されるという一体の意識が生ずると考えられる。しかし、この共属意識は、自然発生的に親和的な経過で生まれるだけでなく、役割感情の内に含まれる相互の役割期待のあらわれとしての規範に支えられている面の強いことは明らかである。以下、個人の行為と規範、さらに共属意識をめぐって、若干考察を付加する。

(三)

規範志向の共同は、集団の存立にとっては、不可欠の要件であるが、集団形成に関しては、必ずしも不可欠の契機ではない⁽²⁶⁾。集団の成立は、前述の如く、目標志向の共同がその本質をなしている。共同の目標に向かう共同の活動が、人々の集合的態度を生み出し、その持続が、集団の成立をもたらす。従って、単に同一の伝統、感情を共有するのみで共同の活動を伴わない消極的な<我々>が、能動的に共同の目標に向かう有意的、積極的な<我々>によって優越されるところに集団が成立し、しかるのちに、集団存立に直接機能する規範や、組織と機能の分化が生まれてくる。

目標の共同は、存在の共同と相互に規定しあい、規範の裏づけによって、成員の態度が融合して、集団が全体として志向される⁽²⁷⁾。存在を共同にするという事実のうちに、成員は、自己を一体的統一にある個人として全体に共属すると見なし、全体への愛を共同にし、成員としての立場において、愛や依存の感情を相互に向けあうのである⁽²⁸⁾。

成員は、一体として統一され、しかも、その一体的統一を対象的に一つの全体として把握する。このことは、集団全体を認知的志向の対象とすることであり、この志向は、全体への自他の共同所属の事実に基づく共属意識を内容として成立している⁽²⁹⁾。このように、全体志向の共同は、集団成員が、自他を一体的統一のうちにあるものとして意識し、それぞれ成員として行為するという事実を前提にして初めて成立する。

フィアカントは、集団それ自体の維持と発展を求める集団成員の意識を「生

衝迫 Lebensdrang」とよぶ⁽³⁰⁾。この意識が強く働くのは、前述のように、感情的統一の強い集団においてであり、生活ゲマインシャフトに典型的にそれが認められるという。しかし、ゲゼルシャフト的性格の強い集団においても、先に見たように、全体性を志向する成員の意識が、集団の存在自体を志向することも少なからず認められ、その際の意識においては、非合理性が合理性を上まわることも稀ではない。従って、集団の存在それ自体を支持し、発展を願う成員の意識は、機能集団にも強くあらわれると考えられる。集団の全体性を強く意識し、その全体性に強い依存感情を抱く人々にとっては、集団自体が一つの価値となり、価値ある全体の拡充発展は、それ自体が成員の追求目標となるばかりでなく、成員自身の自我の拡大にも結びつく⁽³¹⁾。

このように、集団の統一がなされるには、外的に見た場合には、当該集団独自の目標、関心に基づく行為様式が固定するとともに、内的には、客観化された全体への依存と自他同視に基づく我々意識の存在が認められ、かくして、集団は、内外両面から統一体として認識されるのである。

しかし、集団成員各々の内で、我々意識と我意識の葛藤が見られないわけではない。この分離が、集団関心と個人関心の分離、対立にもなる。個人と集団の諸々の葛藤は、古今東西、枚挙に遑がない。

ところで、規範への服従と全体性への傾斜は、有形無形の圧力によってのみ生ずるのではなく、目的合理的な利害の意識や、内面化した価値を認識することに基づく価値合理的意識によって、自発的に生ずることも多い⁽³²⁾。尤も、この自発的服従にも、傍観者が関与している。規範からの逸脱者を罰し、制裁を加えることによって、集団はその統一性を確保するのであるから、行為者は、その制裁を予期し、あるいは回避するために、場合によっては、個人関心を自己抑制して規範に従い、集団関心を優越させることが少なくない。

また、規範を必らずしも支持しない傍観者が多数を占めても、彼らは、それを他者に知られぬように装い、あたかも規範を支持するが如き態度をとることがあり、外見上は、規範の支持者として、集団成員資格を相互に認知するのである⁽³³⁾。このように、規範が形骸化しながらも存続し、行為者の行為が、規範に従わせしめられ、あるいは、圧力や期待に服する事実も少なくない。しか

し、完全に実質を失なった規範は、一時的に維持されても、早晚消滅し、他の規範がそれに代るか、あるいは、集団自体の衰退、崩壊がもたらされるかの何れかである。

ただし、他集団との接触交渉によって、自集団の行為様式および規範が否定を受ければ、それは、自他の共属意識の根底をなす存在の共同の事実そのものの否定であり、この場合には、成員は、規範を自発的に遵守する。個人関心と集団関心が一致することによって、そこに示される共属意識は熾烈なものとなる。

このように、集団存立が、危機に陥る時には、自己救済力として反作用が起こるのも自然の傾向であり、また、個別的な集団成員が、生活の危機に苦しむ際にも、同様に集団内に相互の援助作用があらわれる。これは、同情によるというよりは、むしろ、一成員の苦しみが、全体の苦しみに直結するからである⁽⁸⁴⁾。すなわち、集団の分枝としての成員への援助であり、これも全体性をもつ集団自体の自己保全の作用あるいは生衛迫であろう。集団全体の繁栄および統一性の維持を志向する成員の共属意識のあらわれが、一に対する全体の援助の形をとる。たとえ、ゲゼルシャフト的集団においても、その根本には、ゲマインシャフト的な生活の蓄積があり、この事情は変らない⁽⁸⁵⁾。

しかし、人間は、同時に自己についての配慮をも重視しているものであり、相互援助の用意は、概ね潜在的である。特に、集団が大規模化すれば、援助の相互性は、人格的暖かみを稀薄にし、自然的というよりは、保険や共済という形をとる人為的連帯に基づく制度へと転化する⁽⁸⁶⁾。さらに、近代社会においては、集団成員には、個人主義の性格が強く見られ、個人関心が先行し、成員は、互いに冷淡で無関心な態度をとる傾向が著しい。

フィアカントは、個人関心と集団関心の分離、対立、緊張が、集団ひいては社会の維持存続に関わる重要問題であるとし、生活ゲマインシャフトの復権、強化を意図し、集団の一体的統一を重視したのであろう。彼の文脈からは、各人が、自己の利益のみを追求し、行為したら、国家および社会は如何にして維持出来るかという危機感が認められる。諸個人が最後の統一・調和を形成するための全体性の優越、価値ある観念に結びついた我々意識の再確立が、彼の願

いであった。目標を共同に志向することが、存在および体験の共同に結びつき、また、存在および体験を共同にすることが、全体としての集団への志向となり、かくして集団は安定した存在を確保するとの主意が、彼の集団論に読みとれるのである。

このように考えてくると、フィアカントの所論は、1930年代のドイツを背景としている限界はあろうが、次のような問題を提示している。すなわち、社会の拡大分化に伴い、我々が、ともすれば、〈私状況〉に埋没し、〈公状況〉を展望することが困難になっている現代社会において、公状況が、人間との能動的な関わりを失ない、所与のものとして受容される事実が多いことを考えれば、公状況と私状況の対立・軋轢から生ずる種々の問題に直面する現代人の態度、行為を分析する緒口が、そこに見出されるということである。具体的な研究は、多くの経験的事実を踏まえた上で、行なわれなければならないが、集団と個人、ひいては社会と個人の緊張と統一に着目して社会的事実を観察する営為は、決して古い方法ではなく、今尚、最も基本的な視座を提供してくれるのである。

註

- (1) 清水盛光『集団の一般理論』岩波書店、1971年、271-2頁。清水教授の所論に関しては、本書にとどまらず、筆者が直接受講した講義の内容等も含めて甚大な御教示を頂いた。本稿においても、上記文献以外に直接拝聴した教授の講義内容を多く参考としたことを付記する。
- (2) 本稿で主として参照するのは、フィアカント Alfred Vierkandt (1867-1953) の所論である。周知のように、フィアカントは、ジメル G. Simmel、ヴィーゼ L. von Wiese らとともに形式社会学派の代表的論客であり、その所論が日本社会学界に与えた影響は少なからぬものであった。ここでは、彼の „Kleine Gesellschaftslehre“ 1936 における集団論を検討する。本書は、1923年に初版が出た „Gesellschaftslehre“ に対比する意味で小社会学と名づけられた。これを検討する理由は、本書において、彼が、集団と個人をめぐる問題を中心として集団論を展開しているからである。また、その特徴は、その初版の発行が、1936年であるところから(1949年に再版された)、当時のドイツの社会状況、政治状況を反映して、集団の生命、集団の精神面が強調されているところにある。ここでは、その点を念頭に入れながら、彼の論旨を追ってみたい。

なお、以下の註にあげる文献の他に、Vierkandt „Staat und Gesellschaft in der Gegenwart“ 1921、谷藤重吉訳「現代の国家と社会」(『世界大思想全集第60巻』所

取, 春秋社, 1931年); 松本潤一郎『集団社会学原理』, 弘文堂, 1937年; 松本潤一郎『改訂社会学通論』, 第3版, 弘文堂, 1942年; その他を参考とした。

- (3) Vierkandt, A, *Kleine Gesellschaftslehre*, 1936 (以下 K. G. と略記する) s. 6
- (4) K. G. s. 54
- (5) *ibid.* s. 54, このような論述は, おそらく W. McDougall の “The Group Mind”, 1920の影響を強く受けたことに由来すると思われる。
- (6) 新明正道「形式社会学論」(『新明正道著作集第4巻』, 所収, 誠信書房, 1979年) 127-132頁。新明教授の精緻な論述には, 清水教授の所論に優るとも劣らぬ教示を受け, 本稿の参考とさせて頂いた。
- (7) この点では疑問がある。二人結合を集団とよびえないとは, 必ずしも言えないのではないか。二人関係においても, 単なる結合の域を越えて, 客観形象が生ずることは, 十分考える。例えば, 家族核としての夫婦のみで成立する家族はどうであろうか。
- (8) Simmel, G., *Soziologie*, 1908, 居安正訳「社会学」(『現代社会学大系 I』, 所収, 青木書店, 1970年) 181-183頁。
- (9) 新明前掲書88頁を参考にした。
- (10) K. G. ss. 51-52
- (11) *ibid.* ss. 55-56
- (12) MacIver, R. with Page, C. H., *Society: an Introductory Analysis*, 1950, pp. 440-441
- (13) 清水前掲書, 420頁。
- (14) K. G. ss. 58-60
- (15) *ibid.* s. 56
- (16) *ibid.* s. 60
- (17) このことは, 集団と個人の関係のみに限られるのではなく, 全体社会を構成する諸集団が, 統一調和の関係とともに対立緊張の関係を内包していることにも認められる。
- (18) K. G. s. 60
- (19) Durkheim, É, *Les Règles de la méthode sociologique*, 1895, 田辺寿利訳『社会学的方法の規準』, 創元社, 1946年, 47-50頁。Durkheim, *Leçons de sociologique*, 1950, 宮島喬・川喜多喬訳『社会学講義』, みすず書房, 1974年, 4-6頁。
- (20) K. G. s. 57
- (21) *ibid.* s. 92
- (22) 清水前掲書377頁を参照した。
- (23) K. G. s. 91 および清水前掲書377頁。
- (24) MacIver, *The Elements of Social Science*, 1929, 4th ed. p. 7
- (25) MacIver, *Society: an Introductory Analysis*, pp. 292-293

- (26) 清水前掲書396頁。
- (27) 同上398頁。
- (28) 同上450頁。
- (29) 同上401-402頁。
- (30) K. G. ss. 61-64, 訳語は清水前掲書438頁を参考にした。
- (31) 清水前掲書438頁。
- (32) 同上379頁を参照されたし。
- (33) 高田保馬『社会学概論』岩波書店, 1922年, 214-215頁。この点については, 清水盛光氏が, 前掲書で詳しく解説している。
- (34) K. G. s. 64
- (35) ibid. s. 61
- (36) ibid. s. 65